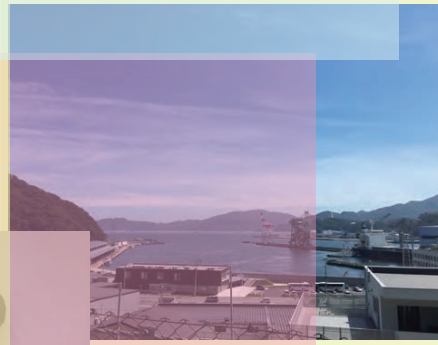
みちのく Renaissance!

家から東北を知ろう

- みちのくRenaissance2020オンライン勉強会ブックレット -



家から東北を知ろう―みちのくRenaissance 2020　オンライン勉強会ブックレット―

発行年：2021年1月
発行所：上智大学グローバル・コンサーン研究所
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1 上智大学中央図書館L-713号室
デザイン協力：佐藤優花

みちのくRenaissance　とは？

みちのくRenaissanceは2012年に発足した上智大学生による団体。「災害と復興」という視点から学生が社会と東日本大震災からの復興について考え、そしてかかわるためのきっかけ作りを活動の主体とする。「誰かの為になりつつ自分の為にもなる可能性を見つける」を活動のミッションとし、日々活動している。

具体的な活動内容として、実際に東北の地に足を運び東北の魅力を五感で知るスタディーツアーがある。この活動からは、フィールドワークを通じて現地の声を聞き学ぶことができる。他の活動は東北に携わる方を講師として迎える勉強会などが挙げられる。新型コロナウイルスの影響に伴い活動にも変化がでたが、現在はオンラインを駆使した勉強会、バーチャルスタディーツアーなどを行っている。

みちのくRenaissance発足の背景

1. 2012年夏に行われた上智大学のイエズス会東アジア5大学グローバル・リーダーシップ・プログラムを原点とし、このプログラムから学んだことや感じたことを活動方針の軸とする。
2. より多くの人々（特に学生）に被災地の復興について考えるきっかけを提供する。
3. 東日本大震災の体験を軸に学生の視点から社会に対してアプローチを行う。
   東日本大震災という出来事をきっかけに日本の将来を考える。

みちのく Renaissance!

オンライン勉強会を始めた理由

今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で、オンライン上の活動が主流になりました。そこでオンラインという特性を存分に生かした企画をしよう、と立案されたのがオンライン勉強会です。普段はなかなかお会いすることのできない東北復興に携わる方をオンラインで結び、活動内容や大学生に向けたメッセージなどを伝えてもらおう、という趣旨で始まりました。5月から9月にかけて、月に1回のペースで東北支援に携わる学生・社会人にご協力頂き、計５人のキーパーソンにお話を伺いました。

オンライン勉強会でお話を伺ったキーパーソンの皆さま

第1回 5月31日

「学生として東北に関わる」

「まちもり大学」の情報はこちら

guest

藤田太郎 さん

東京大学文学部社会学専修課程4年の藤田太郎さん。岡山県出身で、地元でのボランティア活動から地域活性化に関心を持つ。大学2年生の時から岩手県で1か月半にわたるインターンシップに参加。人々の生活の場になるようにと、キャッセン大船渡で活動をしている。キャッセン大船渡は大船渡市の中心市街地を整備して再建された商店街である。雑貨屋や花屋などの物販エリアや、飲食店エリアなど地域の個人商店を中心とした複数の街区で構成されている。毎週金曜日に地元のパン屋を集めて市場を開いたり、広場で伝統芸能を披露したりもする。

また現地の若手に対する需要と北里大学の撤退という2つの要因から大学設立を提案、大船渡まちもり大学を設立。まちもり大学の基本的な活動は月に一度であり、内容は講義とゼミの二つに分かれる。3月から5月にかけて行われる講義では毎回講師を読んで話の場を設け、6月から9月のゼミは講義を踏まえたうえでの実践の場となっている。10月には中間発表があり、そこから3月までは活動の振り返りの期間になっている。

活動を始めた当初はこれからの町を担っていく20代から30代が活動のターゲットであったが、講師として参加した現地の高校の先生を通じて高校生が多く活動に参加した。これにより異世代間の交流が生まれ、高校生特有のパワーと実行力が社会人参加者へ刺激を与えた。しかし同時に活動から距離を置く社会人も出た。新型コロナウイルスの流行を受け、現在はオンラインと対面を併用した活動をしている。オンラインの強みを生かし、参加対象を地域外にも広げる予定。

Q & A

インターンの際、計画が軌道に乗る前の苦労はどう対処したか？
地域の人の話を聞いていく中で違った考えが生まれた。インターン生が一人だったため地域のNPO団体を巻き込んだ。

大船渡でのおすすめのごはんを教えてください
キャッセンエリアならランチもディナーも海鮮・中華・イタリアンなど幅広く選べる。おすすめは「鮨処ささき」のまかない丼。

オンライン勉強会へのアドバイス
ブレイクアウトルームの活用、チャットを活用し、リアルタイムで質問できるようにする。

東北と距離が遠いところに住んでいる学生の活動への巻き込み方
岩手には大学が少ないので、岩手の高校生と都市部の大学生のつながりを作る。

まちもり大学に参加している世代（高校生以外で）は？
まちづくりに関心のある社会人、企業での成長を目的として参加しているキャッセンエリア企業の従業員。

地域の人は藤田さんをどう認識しているか
活動を始めたころは“キャッセンの人”だったが、今では月一で来るのが当たり前の人となった。その認識には自身も満足している。

インターンの活動上の問題は？
コロナの影響で今までのような形で活動が行えなくなったこと、プロジェクト型の組織のため、予定がつかず一度欠席すると戻りづらくなってしまったこと。

大学生活とのバランスのとり方は
大船渡には金曜夜～日曜夜、地域の人にも頼りながら自分の仕事量を調整。

Withコロナでの観光振興
ネットを利用した地域活性化（特産品をネット販売）、オンライン授業、オンラインで現地の人との関係を築く。

大船渡の独自性は何か
行政の中心と商業の中心が分かれていて、それぞれ独自性がある、若者へのサポートが手厚い。

東京大学での活動は何をしているか
UTVT、被災地での教育支援、スタディーツアー。

まちもり大学に参加した高校生たちの今
去年の参加者はほとんど1年生だったので、2年生になり今も参加している。

第2回 6月29日

「外と繋がる地域貢献」

guest

遠藤ゆりえさん

現在NPO法人かまいしリンクの代表を務めている遠藤ゆりえさん。岩手県釜石市の出身で、大学進学を機に上京。大学を3年で中退ししばらくバンド活動をするも、東京に疲れて24歳の時に地元に戻る。そして地域の中小企業を支援する会社に就職した。地元の品を海外に進出させたいと思うも地域に貿易関係の会社がないことに気が付き、就職後2年で会社を辞めニュージーランドへ留学。そこで4年間勉強する予定だったが東日本大震災の発生で帰国。これを機にかまいしリンクを立ち上げる。

遠藤さんが帰国した時点で2019年のラグビーワールドカップ（RWC）日本開催は決定していた。釜石での開催が地元の活性化につながると考え、3年程のRWC誘致に尽力を尽くし見事釜石市での開催が実現した。行政に頼るのではなく市民で盛り上げていきたいという思いから、ラグビーカフェの設立やインターンの学生を巻き込んだ活動などをした。RWC開催後の今は、釜石市をラグビーの町として確立する活動を行っている。

Q & A

RWCの感想は？
開催決定までの活動の中で、お金のやり取りなど生々しい現場を見てきた。しかし実際の試合を見てスポーツの力を実感した。特に子供に与える刺激の大きさに感動した。

RWC開催に向けてどのようにアピールしたのか
経済効果よりも、ラグビーの町である釜石市としてのアイデンティティを重要視し、ラグビー文化の継承を強調した。

これからの活動予定は？
地元の活動のオンライン化に努める。オンラインを使った国際交流を企画。

現在の活動内容
2019年には台風によりキャンセルされたカナダ対ナミビアの試合が、今年は新型コロナウイルスの影響により再びキャンセル。スウェーデンの例などを基に、他地域の人々の引き付け方を模索中。具体的にはカナダの国歌の普及に取り組むことやナミビアのワイン試飲会などを企画中である。

釜石をPRしたい学生にむけて一言
学生だからこそできることをしてくれるのがありがたい。人とのネットワークを広げることが大切。

かまいしリンクとは？

かまいしリンクは釜石の復興と国際化に貢献するNPO法人である。”広い視野を持ち　自らの可能性を切り開いていく　『グローカル人材』を育てること”を活動のミッションとしている。具体的な活動内容として、ラグビーワールドカップ釜石開催への取り組みや空き家リノベーションプロジェクトなどがある。ツイッターやフェイスブック、公式サイトなどからも団体について学ぶこともできる。

link KAMAISHI

豆知識①「美しい海と環境問題」

皆さんはどんなマリンアクティビティーの経験がありますか？地球の7割は海でできていると私たちは知っています。そして、テレビや写真で多くの人が海の美しい世界を見たことがあると思います。そんな陸地とは別な未知の世界にもっと興味を持ってみませんか？

三陸は海に面していて、豊かな自然に恵まれています。震災から約10年が経つ三陸。その被害は陸地だけではなく、海の中にまで及んでいました。復興支援に多くのダイバーが三陸を訪れ、ダイバーのボランティア団体によるがれき撤去などの海の中の復興が何年も行われてきました。海の中のがれき撤去作業が落ち着いた後も、問題は残り「磯焼け」という問題が深刻化していました。「磯焼け」とは、藻場が海流の変化や沿岸の環境汚染とか藻を食す生き物による食害が原因で海藻や海草が死滅し貝や魚が取れなくなってしまうことです。

しかし、ボランティア団体のダイバーさんの取り組みが、著しく改善する結果を出しています。三陸のマリンアクティビティーには、カヤック・スノーケリング・ダイビング・SUPなどがあります。全身で大自然を感じ、のんびりと非日常を感じることができます。また、海の生物は地域によって大きく変わってきます。そのため、三陸でしか見ることのできない海の景色があります。しかし、マリンアクティビティーが美しい感動をもたらし、海の幸を堪能できるのは、誰かがその状態を保ってくれているから、ということを知っておく必要があります。海の魅力を知ったことをきっかけに、海の環境問題に目を向けてみませんか？

第5回オンライン勉強会講師の細江絵梨さんの活動されている（一社）根浜MIND主催の「根浜海岸海あそび」では、シーカヤック、スタンドアップパドルボード、レスキューボード乗船、スノーケリングなどが体験できます！

第3回 7月20日
「東北に魅せられて」

guest
柏木彩織 さん

現在立教大学社会学部4年の柏木彩織さん。70seedsでライターとしてインターンをしながら、東北の食材を提供するNPO法人「きっかけ食堂」で運営に携わっている。高校二年時にニュージーランドの高校に転学し二年間学ぶ中で、現地で発生した震災の爪痕が残っていることに衝撃を受ける。それがきっかけで東日本大震災に興味を持ち、大学一年時に陸前高田市に行く大学のプログラムに参加。そこで津波と震災の脅威を肌で感じる。大学二年時に行った三陸地域でのフィールドワークがきっかけで人脈が広がり、その後岩手県釜石市のNPO法人で一か月住み込みのインターンシップに参加した。東京に帰るも東北にいる時との温度差を感じ、東京にいても東北へのつながりを感じたいと考え、「きっかけ食堂」の運営に携わるようになる。

「きっかけ食堂」は誰もが楽しく、継続的に自分らしく東北にかかわるきっかけとなるプラットフォームを提供することを理念とし、食を通じたイベントを毎月11日に実施している。現在はコロナウイルスの影響もありオンラインにて「おうちできっかけ食堂」のイベントを開催している。彩織さんが活動をする際に、「とりあえずやってみる」「楽しいか楽しくないか」「リアクションを大切に」という3つのことに重きを置いている。東北に足を運べない時期も、手紙などを通じて築いてきた人脈を大切にしている。

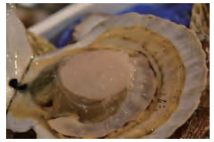
Q & A

きっかけ食堂はどのようなスケジュールなのか
週に二回のミーティング。テーマは一か月前に検討し始め、各回2人程度、そのテーマに精通している人が企画の担当者となる。

おうちできっかけ食堂の詳しい内容は？
気仙沼の例だと、参加者は生産者さんの商品（カツオセット）を購入し、当日はzoomを用いて、届けられた商品を食べながら生産者の経歴や三陸地域について学ぶ。これまでは距離的問題できっかけ食堂に参加できなかった人々の参加率が上がった。しかし、全体的な参加人数はオフラインに比べると減少していることが課題。効果的な広告の仕方を模索している。

きっかけ食堂とは？

きっかけ食堂は東北の食材を使った料理を提供し、全国各地で毎月11日に開催される食堂です。2014年に立命館大学の学生が、毎月11日だけでも東北や震災について考える「きっかけ」を作りたい、と立ち上げられた団体です。現在は全国各地に展開され、2020年度はきっかけオンライン食堂も開催されました。食材は東北各地の生産者から直送され、地元ならではの食べ方や付け合わせ、料理方法を直接教えてもらうことができます。また集まったお客さん同士で東北や震災について語り合う場にもなっています。是非お近くのきっかけ食堂に足を運んでみてください。



全国にきっかけ食堂展開中！
・きっかけ食堂　仙台
・きっかけ食堂　東京
・きっかけ食堂　千葉
・きっかけ食堂　愛知
・きっかけ食堂　大阪
・きっかけ食堂　京都
・きっかけ食堂　島根
・きっかけ食堂　徳島
・きっかけ食堂　熊本

第4回 8月25日

「都市と地方をつなぐ働き方」

guest

戸塚絵梨子さん

株式会社パソナ東北創生代表取締役社長の戸塚絵梨子さん。大学卒業後、株式会社パソナの営業職をやっていたが、震災後に休職し、釜石市でボランティア活動を始める。そこで、地域の困りごとを解決する上でコーディネートする活動を行う。釜石市との出会いから、現地における地域復興の担い手不足を痛感し、自分が釜石市と繋がりを持ちボランティアとしてではなく、事業として釜石のニーズに寄り添ってきた。そして、今までなかったものを作り出す持続可能性への挑戦へと復興の幅を広げてきた。

2012年から2016年の間は復興支援で人が流入したことで社会減は少なかったものの、2017年以降は復興支援の終わりと同時に再び人が流出してしまうという問題が発生した。震災後に生まれた地域の変化とよそ者に対して寛容な地域であるという釜石市の強みを生かしてオープンシティ戦略を立ち上げた。パソナ東北創生は地域での豊かな生き方・働き方を作るというコンセプトのもと、釜石市と地域の関係創出支援と地域での多様なキャリア支援という2つのアプローチで取り組みを行ってきた。そして、ローカルベンチャー事業や東京のUターン希望者を対象とした新卒向けの合同説明会、女性の短時間勤務の推進などの事業を通じて現地における多様な働き方を支援している。今日においては、新型コロナウイルスの感染拡大によってオンラインでの活動を推進し、新たな形で釜石市と首都圏の人々の交流や釜石市における人材育成の場を提供している。

Q & A

起業家としての苦労は何か？

活動を続けるにつれて事業に対する考えが強くなるので、その分大変だったり落ち込んだりもする。経営的な観点からの判断を下すのも大変。

釜石外にいる学生に対して、釜石にいる人の視点からやってほしいことは何か

現地にはオンライン環境に慣れていない企業が未だに多く存在する。また地域性もあり、オンライン上で話す機会を設けたとしても、恥ずかしがって話が進まないこともある。この問題に関しては、コーディネーター（企画者）よりも学生が引っ張っていった方が効果があると思う。学生ならではのプランを提案してほしい。

大学時代の就職活動や、就職後都内の企業に勤めていた時の起業への決意などのお話をより詳しく聞きたい

就職中は自分のしたいことは決まっていなかった。一から何かを立ち上げることが好きなのは分かっていたが、それがどのように仕事で実現するのかは分からなかった。教員を目指した時期に中高生に授業をした経験から、社会に出ていない大学生として教えられることは限られていると気付いた。そこでまずは自分が社会に出て学生たちに伝えられるような人生経験をしようと思った。

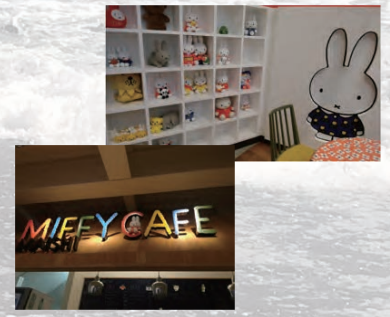
株式会社パソナへの入社の理由は、人の人生に携わることができる人材会社だからこそ、社会のあらゆる面を見ることができると考えたからである。起業に対し踏ん切ることができた理由は、一緒にやりたいと仲間になってくれた後輩の存在やパソナの先輩などが挙げられる。

株式会社パソナ東北創生の
Facebookページはこちら！

豆知識②「こんな近くにオランダが!?」

コロナ渦の今、海外に行きたいのにいけない。そんな気持ちになっていないでしょうか。オランダになら行けるかもしれません。
オランダ島、正式名称を大島と言うこの無人島は岩手県下閉伊郡山田町の山田湾に位置します。この名は1643年の江戸時代、遭難したオランダ船の「ブレスケンス号」が漂着したことに由来します。当時の日本は鎖国中であったため、船員は捕らえられて江戸へ送られたそうです。その後彼らは江戸で西洋砲術を伝授したとも伝えられています。
オランダ島は東北唯一の無人海水浴場として親しまれていましたが、2011年の東日本大震災後しばらくは島が閉鎖されていました。2020年現在は町民限定で利用が再開しています。
オランダ島の魅力は海水浴だけではありません。織笠大橋からの眺めも圧倒的です。織笠大橋からは、霧霜ヶ岳と十二神山、そしてオランダ島すべてを視界に収めることができます。透き通るような青い海に浮かぶ離島を眺めるのも最高です。
様々な魅力にあふれる岩手県のオランダ島、ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

オランダと言えばミッフィー。ミッフィーと釜石のつながりは東日本大震災を起点に始まりました。ミッフィーの作者ディック・ブルーナさんから被災地にミッフィーのイラストとメッセージが寄贈され、ディック・ブルーナ・ジャパンと釜石市の絆は強くなりました。被災地に彩りを取り戻したい、という地元の方々の願いから、ミッフィーカフェは釜石情報交流センターと共に2015年にオープンしました。ミッフィーにちなんだ料理や釜石オリジナルグッズが販売されています。



山田観光協会「オランダ島」

（一般社団法人）オランダ島

ミッフィーカフェ

第5回 9月28日

「コーディネーターとしての復興支援」

guest

細江絵梨 さん

細江絵梨さんは東日本大震災後のボランティア活動をきっかけに、釜石ローカルベンチャーという地域支援制度を利用して、岩手県の根浜地域内外を繋ぐコーディネーターとして活躍している。

細江さんは中学生の頃から国際協力・社会福祉に興味を持ち、大学時代には途上国NGOへ学生インターンを送り出す学生団体で活動、持続可能な国際援助に興味を持つようになった。活動の中で実際のスラムでの暮らしやそこに住む人の幸せのあり方を知り、「幸せ」の形が自分のイメージしていた範囲を超えて個々人で感じるものということに気づいた。そんな時東日本大震災が発生し、通いでのボランティア活動に従事するようになる。しかし自分自身がもっと現地を知り、現地の人の役に立ちたいとの想いで働いていた会社を辞め、被災地に住むことを決めた。

ボランティア活動を経て、岩手県根浜・鵜住居地域の眠れる資源を繋ぎ・磨き・動かす「根浜MIND」プロジェクトに参加し、釜石市の鵜住居復興スタジアム周辺地域で住居主体観光コンテンツが溢れるようなコーディネート事業を行なっている。事業は同地域がコンテンツで溢れるような地域の隠された資源を探すことを課題とし、地域住民一人ひとりが活躍する地域社会を目指している。これまで地域巻き込み型のイベントを開催し、防災におけるノウハウを身に付けるスタディプランを実施するなど、老若男女問わず協働性を大切にした活性化に取り組んできた。また学生時代の経験から、海外組織と連携した教育プログラムの開始や防災×国際協力の事業も同時に推進している。

Q & A

根浜地域は元々外部に対して受け入れやすい文化があったのか

きっかけは1960年に岩手県で開催された国民体育大会にある。当時、海水浴場として親しまれていた根浜は国から民宿事業補助があり、今中心となっているのはそこで民宿を経営し始めた人々のお子さんたち。

新型コロナウイルスが流行する前と後で地域の復興に変化はあったのか

観光関係の事業者はとても大変な状況にある。根浜地域の主要な民宿・旅館の人は震災から9年走り続けて、休めている時間でもある。この9年を振り返って、また生きていくためのエネルギーを貯める時間としている。もう震災から10年、復旧・復興を振り返る必要がある、というのも地域で共有されている。9年前の消化しきれなかった悲しみを消化している。

Study Point

2012年から1年間、岩手県盛岡市を中心とした、被災地と県外から来る物資や個人・企業からのボランティア団体をマッチングしたりコーディネートをしたりする形で復興支援活動を行った。活動時は震災から1年が経っており、被災地域によって復興支援の格差が生まれるようになっていた。そこで細江さんは、支援から取りこぼされた場所を中心に、現地の本当の声に寄り添った支援活動をするようになる。そして現地に踏み込み、そこで活動していく中で、虎舞などの郷土芸能の魅力に気づかされたという。地域の祭には人の心を元気づけるパワーがあることを実感し、地域にとって郷土芸能というものは再生の原動力であることを知った。そこから現地の魅力をもっと多くの人に伝えたいと東京と岩手での2拠点居住を始め、「岩手」をキーワードに集うコミュニティを作って岩手の食・郷土芸能・移住促進など岩手を多くの人に体感してもらう活動を行っている。細江さんはこれからも東日本大震災で学んだ防災意識を風化させずに、コロナ禍でも盛り上げていくプロジェクトを、心の赴くままに、自分が納得できるまで挑戦することで実現しようとしている。

(一社)根浜MINDとは?

(一社)根浜MINDは東日本大震災をきっかけに、住民主体のボートレスキューシステムづくりを実施するために設立された団体です。根浜の「海を守って、遊んで、暮らし、持続可能な海辺の地域暮らし」を目標に、活動をとおしてつながり人口の創出に貢献しています。毎年、サマースクールや海遊びやビーチパークなど様々な体験プログラムを実施しています。

一般社団法人 根浜MIND

みちのくSNS

Instagram▼
michinoku.renaissance

Twitter▼
Renaiss72391052

Facebook▼
https://www.facebook.com/michinokurenaissance/

Website▼
上智大学グローバル・コンサーン研究所
https://dept.sophia.ac.jp/is/igc/
(右上の検索窓で「みちのく」を入力!)

みちのくRenaissance 今後の活動

2021年2月末　活動報告書作成予定

みちのくRenaissance メンバー募集

みちのくRenaissanceでは新メンバーを募集しています!

東北が好きな方、みちのくの活動に興味のある方などいましたら

下記のメールまでお問合せください。

michinoku.renaissance@gmail.com